# Column Views 9 「スペイン独立戦争」と歴史の創出

「五月二日の事件は、スペインのすべての地方に筆舌に尽くしがたい憤怒の情を呼び起こした。そしてすべての地方はそれぞれが備えていた部隊を武装させ、祖国（パトリア）の独立を守るために、それぞれ独自にフランス勢力に対する蜂起を開始した」。

これは、版を重ねたある歴史書の一節である。一八〇八年五月二日、マドリードを占領していたフランス軍への果敢な民衆蜂起が起こり、翌三月にかけて過酷な弾圧がおこなわれた。だが、これが契機となって、フランス皇帝ナポレオンへの抵抗は、全土に燎原の火のように広まる。スペイン正規軍は敗北を重ね、フランス軍はほぼ全土を掌握するに至るが、民衆の抵抗、とくにゲリラの攻撃はやむことがない。ヨーロッパの戦局の悪化、ポルトガルからのイギリス軍の攻撃も加わり、疲弊したフランス軍はついに半島からの撤退をおこなう。一八一四年三月、「期待された国王」フェルナンドの帰国を民衆は熱狂的に歓迎する。これまでの通説では、「スペイン独立戦争」はおおよそこのように述べられてきた。

たしかに六年にわたるこの戦争が、ナポレオンの帝国の土台を大きく揺るがしたことは間違いない。ラス・カーズの『セント・ヘレナの回想』には、帝国の夢に破れ孤独と無為のなかで、ナポレオンが次のように語ったと記されている。「このスペインでの不運な戦いは、フランスのあらゆる不幸の最初の原因であった。……私の災禍のあらゆる状況は、ここで不幸な難事と結びつくようになる。この戦争はヨーロッパの士気を消沈させ、私の困難を複雑なものとし、イギリス兵たちには鍛錬場を開いた。この不運な戦争のために私は破滅させられたのだ」。

しかしながら、スペインの民衆が「祖国の独立を守るために」一致団結して戦った「スペイン独立戦争」としてこの戦争を描くことには、近年、痛烈な批判が出され、また戦争の諸相についてさまざまな再検討が

おこなわれている。

そもそもこの名称自体、のちの歴史が創り出したものであることが明らかになっている。この戦争にかかわった多くの同時代人は、スペインに侵入したフランス軍に対する「蜂起」や「戦争」であると語っていた。さらに、これまでのカルロス四世とゴドイの専制政治に代わって主権を制約する新たな政体を樹立しようとした人びと、とくに自由主義者は「革命」という言葉を好んで使っていた。だが、「期待された」フェルナンド七世が絶対主義復帰を果たすと、自由主義者に弾圧が加えられた。厳しい検閲のなか公式の歴史では、この戦争はナポレオンによって簒奪された王位を取り戻すための戦いに意味を限定され、したがって「(反)ナポレオン戦争」という用語が一般に使われた。しかし、一八二〇年代に入って散発的に見られた「スペイン独立戦争」という用語が、三〇年代以後、旧勢力との妥協による「改革」によって漸次的にアンシャン・レジームが廃棄され、自由主義国家が創り出されていく過程で、広く使用されるようになった。

すなわち、イギリスにとってはイベリア半島を舞台にした戦争でしかなかった「半島戦争」(アングロサクソン歴史学はこの呼称を現在も使っている)は、一九世紀の「国民国家」形成の歴史のなかで、「スペイン国民意識」の覚醒と高揚のできごと――「独立」のための戦い――として理解され、またそのように喧伝された。そして「スペイン独立戦争」という用語は、モデスト・ラフエンテらの「国民の歴史」を描くロマン主義歴史家によって定着していった。そこでは、この戦争のなかで民衆が叫んだとされる「宗教、国王、祖国万歳!」という言葉もまた、自由主義穏健派が築き上げようとした国家――カトリックを国教とする穏健な立憲王政――への歴史的根拠として援用されることになった。

こうした国民意識の醸成(スペイン・ナショナリズム)のために創り出されていった「歴史」のなかで、とくに強調されたのが一八〇八年の「五月二日事件」であった。この民衆蜂起は、「国民」としての独立と自由を守ろうとする自発的で全体的なマドリード住民の蜂起として称揚された。はやくも一八一一年のカディス議会で自由主義者は「国民の自由のための殉教者」のた



めの犠牲者を弔う「国民の祝日」として定着した。

さらに、五月二日の「歴史的記憶」を残すために数々の記念碑が建てられていったが、なかでも注目されるのは、一八四〇年に「忠誠広場」に建てられた五月二日オベリスク(高さ約二九メートル)である。これには、この場所(プラド通り)で銃殺された無名の民衆の遺骸とともに、モンテレオン砲廠でフランス軍と戦って犠牲となった二人の軍人ダオイスとベラルデの遺骸も納められ、「国民は、スペイン独立のための殉教者に感謝する」、「愛国心への不朽の名誉のために!」との銘が刻まれた。「五月二日」は、祖国に忠誠を尽くす軍人たちを称える日ともなっていたのである(一九八五年にも、現国王によって「祖国のために命を捧げた者」への石碑がここに添えられる!)。

ところで、二〇世紀初めには、「国民の祝日」は新たに一〇月一二日(コロンブスのアメリカ「発見」を援用した「スペイン民族の日」)に取って代わられ、五月二日はマドリードの地方祝日に限定される。二〇世紀には、やがて自由主義政府のもとで、この日は祖国のための犠牲者を弔う「国民の祝日」として定着した。

抵抗や独立ではなく、卑劣な敵人の帝国イメージが歴史的記憶として必要とされたのであろうか。なお、スペイン内戦期には、共和国陣営では五月二日は、ふたたび国民的抵抗――このときはファシズムへの抵抗――の日として記念された。また、ペレス・ガルドスの小説『五月二日』(初版、一八七三年)が、反乱軍による包囲のただ中のマドリードで新たに発行されている。

さて、こうして「歴史神話化」された五月二日事件に関する最近の研究は、その「自然発生性」と「全体性」を大きく疑問視する。一九九二年に開催されたシンポジウムでも、「自然発生」説が批判されて、一方でフェルナンド七世支持派がさまざまな策動や扇動的行動を起こしていたこと、他方でフランス勢力の側から挑発の動きがあったことが史料的に提示されている。

また「すべての市民の蜂起」といったイメージも強く批判された。蜂起に参加した圧倒的多数は、のちになって「民衆(プエブロ)」(ほぼ「国民」という肯定的意味の)として理想化されるが、実際にはアンシャン・レジーム末期の社会のなかで一般に否定的に呼ばれていたところの「民衆(プエブロ)」(すなわち下層の「群衆」

column ▶「スペイン独立戦争」と歴史の創造

という意味の）であり、マドリード市内の小商人、職人・徒弟、泰公人、物売りたちであった。そして、上層市民（「思慮のある上品な人びと」）にとってこの蜂起は、家の中に閉じこもって騒ぎが収まるのを待つべき事件であった。政府・都市当局だけでなく、教会・異端審問所もまた、事件の直後は、この「ナポレオン皇帝軍に対する下賤の者たちの暴動」を一様に非難し、市内の秩序回復のためにフランス軍に協力したことが明らかである。

したがって、祖国の危機に対するマドリード市民の自発的抵抗といったかたちで事件を語ることはもはや許されない。だが、「上からの」策謀ないし陰謀がマドリード市内の広範な民衆を動員したと考えるに足る史料も残されていない。今後の研究は、民衆蜂起が自然発生的か誘導的かという（あまり意味のない）議論を避け、広範な下層民衆を暴動へと駆り立てるに至った社会緊張のあり方を具体的に捉えていく必要がある。「五月二日の蜂起は、一方で、マドリードにフランス軍が入城して以来、市内で日常的に起こった数々の事件の一連の流れのなかに見なければならない。……他方で、アランフエス暴動（一八〇八年三月一七日）とそれをもたらした諸原因、さらにその諸結果を含み込むより広い一連の流れのなかに据えてみる必要がある」、とエスパーダス・ブルゴスは指摘している。

では、五月二日事件を発端として始まったとされる「スペイン独立戦争」は、どれほど「スペイン国民意識」の表明と呼べるようなものであったのだろうか。この点でも最近の研究では、これまでの「同民」神話化への批判が強い。ロンガレス・アロンソは、五月二日事件からアストゥリアス地方評議会が反フランス宣戦布告を出すまでには三週間以上のときが経過しているため、マドリードの事件と諸地方の蜂起の因果関係に疑問を呈する。そして、五月二日事件がのちに神話化された大きな理由として、それがスペインの「首都」で起こった事件であったということを指摘する。さらにデュフールは、かなりの数の聖職者が親フランス側に立ったことを明らかにして、この戦争の全体にとっても、聖職者の役割や「宗教的感情」を過度に強調することを戒め、その一方で、戦闘の地方的性格が濃厚であったとして、諸地方の「地域主義的感情」が根強かったことを指摘している。

こうした見直しのなかで、フランコ体制崩壊後に大幅な自治権を獲得するに至った歴史的諸地域（少数言語地域）、とくにカタルーニャが、「スペイン独立戦争」においてどのような「国民意識」を抱くに至ったのかということがモリネール・ブラダらによって問題にされている。すでに早くからヴィラールは、抵抗という「一体性」の背後に諸階層は、それぞれにさまざまなイメージを描いていたと指摘していたが、「国民意識」の高揚ということ自体にしても、それがいかなる階層といかなる地域の「国民」意識であるのかを問うことが必要だからである。

さらにカナレスの研究は、フランス勢力に対する戦いの「一体性」、戦争の集団的偉業といったことを疑問視することから出発して、史料的検討によって、カタルーニャではスペイン正規軍からの脱走が場合によっては部隊員数の三割にも上っていたという事実を指摘する。これは、一八世紀初めのスペイン王位継承戦争で失われたカタルーニャの伝統！――カスティーリャの軍隊には徴募されないという特権――の回復の要求であったことを指摘している。

「スペイン独立戦争」という名称を与えない。二〇世紀に入り、スペイン・ナショナリズムの「国民意識」に対抗するかたちでカタルーニャ・ナショナリズムの「民族意識」を強調する歴史学は、カタルーニャにおける民衆の戦いをスペイン独立のための戦争ではなく、カタルーニャを侵略したフランス人に抵抗した戦争であったという意味で「(反)フランス人戦争」という用語を使っているのである。なおフンターナはこの言葉が「民衆のあいだに起源をもつ」と言うが、いつ頃からかは不明である。

ところで、スペイン独立戦争には、もう一つ別の「神話」が生まれている。カディスで開催された議会——身分制によらない構成をとり、国民主権の原則を打ち出したがゆえに最初の近代議会とされる——が、一八一二年三月に公布した憲法(カディス憲法)についてである。「主権は、本来的に国民に存する」と謳ったこの憲法は、一八一四年五月、フェルナンド七世によって廃止され、一七九一年フランス憲法の革命的・民主的諸原則を模倣した」ものであると断罪された。以後、革命と反革命の交錯する歴史過程をスペインは歩むが、カディス憲法が「革命的・民主的」なものであることは自明のこととされてしまった。スペイン自由主義の「神聖なる法典」として記憶され、保守的・カトリック的スペインに対抗する自由主義的スペインを表象するものとして捉えられてきたのである。

しかしながら、「一七九一年フランス憲法」と比べてもカディス憲法がかなりの非近代的性格をもつことを、最近の研究は指摘している。明示的な「権利の宣言」の不在、「奴隷」の容認、「アフリカを出自とする者」を「市民」から排除、生計手段や読み書き能力のない者、「奉公人」を市民権行使から除外といったことに加えて、何よりも顕著な相違は、その宗教的規定である。「スペイン国家の宗教は、現在および将来ともにカトリック教」であり、「国家は、……他のすべての宗教の活動を禁じる」(第一二条)とされており、自由主義国家スペインの統合原理としてカトリック教の堅持が打ち出されていたのである。

「宗教、国王、祖国万歳!」を唱えてフランス軍に抵抗する民衆をまえにして、カディス議会のスペイン自由主義が、古い教会の伝統的権威に挑み、新たな国民主権の原理を提示することは不可能であった。カディス議会がその支持を民衆に訴えたビラには、「宗教、フェルナンド、憲法!」と謳われていた(図を参照)。

(立石博高)


参考文献

志摩隆夫編『ナポレオンの戦争』講談社、一九八四年。

立石博高「スペイン独立戦争と『国民意識』」『一橋論叢』一一〇-四、一九九三年。

同「『五月二日事件』再考」『研究報告』(東京外国語大学海外事情研究所)一〇二、一九九五年。

同「スペインの自由主義とカディス議会」遅塚忠躬ほか編『フランス革命とヨーロッパ近代』同文舘出版、一九九六年、所収。

Alvarez Junco, José, "La invención de la Guerra de la Independencia", *Studia Historica-Historia Contemporánea*, Vol. 12, 1994.

図　カディス議会の配った宣伝ビラ——「宗教・フェルナンド・憲法!」のスローガン。「三者の団結にまさるものはない」と訴えている。